空気が売買される環境危機（２０１６・１・１４）

人間の生存に必要なものは、形而上的には愛情、宗教、哲学など多種多様であるが、形而下的には空気、淡水、食料であることに異論はないであろう。それらを摂取しないまま普通の人間が生存できる時間は空気では数分、淡水では数日、食料では数週であるから、この順番で必須の物質ということになる。地球には、これらが豊富に存在していたため、人口は一万年間で千倍以上に増加してきた。

ところが、人口の増加とともに人間が使用する資源が急増してきた結果、必須の物質が不足するような事態が出現している。食料は現状では供給と需要が均衡しているが、生産場所と消費場所が同一ではないため、世界の貿易総額の六・五％程度が食料の貿易になっているうえ、配分の問題により、栄養不足状態の人口が約一二億人、栄養過多の人間がほぼ同数という矛盾がある。しかし、人口が急増していけば均衡状態も破綻する。

淡水は現状でも深刻な問題が発生しており、水道の蛇口からの真水を飲用できるのは一〇数カ国という調査もあるし、安全な真水が入手できない人口は現状で世界の三分の一であり、二〇五〇年には三分の二になるという予測も発表されている。その結果、ミネラルウォーターが商品となり、二〇一二年にはペットボトル換算で五〇〇〇億本、一人あたり年間七〇本を消費している。最大のメキシコでは四〇〇本近くになっている。

そして本題の空気である。一九一〇年にハレー彗星が接近したとき、地球が彗星の尻尾を通過する約五分間、空気が欠乏するという噂話が流布し、銭湯で潜水して呼吸停止の練習をする人々や、自転車のチューブを何本も購入して空気を貯蔵する人々が登場した。さらに自暴自棄になって財産を蕩尽する人々、自殺する人々も出現したといわれる。笑話のようであるが、最近、それを再現するような事態が出現してきた。

空気を缶詰にして販売する企業が登場したのである。受験勉強の学生や深夜勤務の人々が目覚ましの目的で使用する酸素スプレーはすでに商品になっているし、富士山の空気の缶詰も土産として発売されているが、今回は高額の国際商品である。販売しているのは二〇一四年にカナダで設立されたベンチャー企業「バイタリティ・エア」で、ロッキー山脈の登山やスキー客用に酸素ボンベを販売するのが本業であった。

ところが昨年からバンフ国立公園周辺の清浄な空気を圧縮して金属ボトルに封入し、面白半分で吸入装置と一体で三リットル封入製品を一七〇〇円、七・七リットル封入製品を二八〇〇円で製造し、「我々は高度に汚染された地域で生活していかなければならないが、この製品はそれへの対策である」という冗談のような宣伝で販売しはじめたところ、中国で人気商品となり、一部は生産が対応できないほどの売行きになったのである。

一九五二年冬に、ロンドンスモッグ事件と命名されるほどの大気汚染が発生し、市内で一冬に一万二〇〇〇人以上が死亡したが、それに匹敵する昨今の北京など中国の都市での大気汚染は、上記の宣伝文句も冗談にならない実態である。ミネラルウォーターの容量あたり価格は水道水の約一〇〇〇倍であるが、それでも中国は世界二位の消費大国であり、このまま進行すれば、無料の空気も購入する大国になりかねない。

二〇世紀は石油争奪の世紀であり、二一世紀は淡水争奪の世紀になるという見解があるが、場合によっては空気争奪の世紀が到来するかもしれない。昨年のＣＯＰ二一では気温の上昇が議論の焦点であったが、それだけであれば人間は生存できる。しかし、その影響が食料、淡水、そして大気にまで波及してくると、その争奪は熾烈な紛争の原因になりかねない。人類の叡智が要求される世紀である。